笑談貧福軍記

三編 上

へ遠13
1897
7

遠へ15
明治
1897
7

序

七書武備志を日新利鋤の両性と
席(セキ)をあらそひ。黄物のくゆ布ときし
大唐代をなびかす。水ゆるが貧福
軍(グンキ)紀を。既(スデ)に後の物粉(カズ)をかなる。
ゝゝゝの者(カンダ)も仏(ヘン)ぐて。千歩萬化(クハ)
の戦闘(タヽカヒ)をなすも。ゝゝど貧(ヒン)方を資糧(シリヨウ)

之〳〵。世〳〵の車がゝり一体のゝ
わゝれ引ゝ中ゝ蜀ゝ。動ゝぐ
福方ゝ也ゝ怪の陣よまゝれゝる。ゝこ
釜を脱ぐよいゝる。この恢優をんゝ
ゝゝぐ。驕奢の敵と退け仁慈の良士を
獲家内和を一ゝ
酬よいゝふゝ。乃ゝ戈をゝゝて

著書まゝ茅山の峯遥なれど。ゝれる
神樣紗筆をほどこしゝばを方こ
凱歌をゝぐゝゝ。ゝは次海の出ゝを後
延申扶菊花馥郁ゝる籬下よ
筆を採るゝのゝ

九華山人

不自由さへ
なくば枕の
夕月の
一荷哉
再出 髪結文五助成
廣井ノ家士

再出 徒媛

ひんぐく
身内皮辯字海盗

味噌
ふくぐく
紀里長登岸春豊
ひんぐく
由摺衣紋姿吉

三編目録

第七回　可賀を偽寄て助成徒姫ふたのぶ

第八回　恩愛ふ迫て胸吉奸計ふ陥る

第九回　姿好貪ふ降りて寢手松の城を責る

附言

拙作の貧福軍記幸ひふ行はれて書肆の催促頻りなれば既ふ今三編ふ及ぶる其冊中助成徒姫ら條を著さの恥ら艶情本ふ似るの文味なりて皆表題の趣意を失さるとのゝ皆是貧富手枕の余情ふて且婦女子ふ失を止んゞ爲るり將次編ふ至りてハ遊里の世界をとりこゝ女武者を出して貧国福国の両將を陥らるの段ろ凡五編ふて滿尾ふさと欲を素より貧毫の戯作あれバ文言の緩を誤字のたゞひゝ炊ふ強ち是等をとゞめなゝ唯可笑とのゝ高評を孫ゝふと云

萬延紀元晩春　一荷堂主人誌

笑談貧福軍記三編巻之上

一荷堂主人戯編

第七回　可賀を偽寄て助成徒姫ふ忍ふ

見越の松身代と共ふ大ろ有餘間の表口横巾ふ同じ。格子の内ふ大鼠の網を大ろ張り。門口ハ柱左右ふ分ち。二間の揚店ハ大ろ千島琉の石ゝ。青石たゞ五尺の水滿泉洋洋と錦奥ふ在ろ。堀溝ハ御影石を畳ふ。庭ふ新ふ植し角の蔵乾ふ建て。絹布の暖簾飜と翻り。終日灰吹の音

かくと。曾て鉄鉢ふひとーく。天地の音こゝと叩たて陣鉦のごく。夜を起番の拍子木ハ時を告ゝ非常を守り。捨子ぞんの提灯新たらしく。貧者の膳を供ゝ。抑まゝ何人の城郭ゝるゝと尋るゝ。彼福方の長豆廣斗氣迚守ゝ居城ふゝて。其名代両替城といふ。家門の繁昌いとゝ。十貫目箱ゝもふ運へハ革製布の出立へ。百メ二百メの鉄直ハ大筒墨ふ。ひとーく東ふ来ゝ西ふ押ハ。寶とゝんぐ扨ふとゝ。ゝ見石をゝるゝ。ゝ城中持口を守る諸士者

者ゝ。まつ店先上ゝ口を守る大將ハ。此春元服四郎遠長。金銀取渡ー方とーて此所ゝひゝ結指の内ハ手形配當員讀米ゝ濱十郎引請。烏帽子調郎取成。金相庭ゝ方玄門金延。いゝ智恵ゝ者ゝゝ者ゝゝ。唯面ゝ髭ゝゝ。ゝゝゝ。ゝゝゝ。奥店口ハ天坪ゝとーて。欠引金録郎徳成。當家の老豆横島内膳。渡井門左門。病持相賀ゝと各ゝ大福帳の前ゝ扣へ。中庭玄関口ハ。音信書翰方とーて。四年紋之丞古長。式日勤之進行益。臺所口ハ買物方とー

今田青二齋白面。其外部家口ハ。休座市浦。友野三人
いろまも一騎當千の家臣。我持口をこそ守り其嚴重な
らぶるこなく。如何ばど内損つゞくとも容易落城ならじ
るゝ。鎧ハまもく榮へる。さきべ此廣井家の息女不徒姫と
いるハ今歳二八の春過く。諸藝其ゆり賜ふ。香茶歌詩ハ
いふもさらなり。糸竹の道ハ妙手。あるも容顔殊さとくも。
貴姫ゐ小町もなぞ丈く丹ゆ。係さべ両親寵愛ふて。呪今や
一人の女子ゐまべ何まも姫のいふふまゆ心のまゝふ養育ゐる。

蒼こゐゐ今ハそや。春情春風意おこのよハヒ。花さくとゐハ。梅
屋鋪。桃谷。さくらの宮のハて。牧丹の婢ふこのゝ。うゐゐ春
ゐ夏ゑれば彼優何の納涼舟。ゆつさとそれとや陰さへ。恋ゐ
下女ふそ矢らゆ月見萩見の弁當ゆ。まゞこのゝ。ゆ草狩
とゆふてハ顔ゐゑれゐハ。てゐ係紅葉。雪の朝。四季とゐ景ぬ
戯場ゆ。唱哥ざらえ。平ゐ舞ざゝへ。風手をつくて。一衣
ゐハの好こ。髪の結ふ。年の花。流行ゐ。きぬ。粧ひ。何ま
ゆ徒ゐ人ごとふ見ふさゐ者ゐゐゝハ。福方諸国の大小

名。吾ら徒姫を娶んとさうぶ〳〵結入とる者あること。姫い元
より父朝吉の家を擇ミて婚をこの人へとろふ。のゑひ
縁もあく。唯いなづゝよ過ぬ。是首ふ街髪結之丞助成
へ此ゑど山子の里ふ住たる面將監と対詩をあ人一合て
たもとよる。日毎ふ廣井の舘ふいりこと。何とぞ姫をあびろ
せんと日頃よ倍〳〵自をやう〳〵。一度の食へとまて。
三回の錢湯へ缺ることなく。日髪ゆこせて風姿をあと
ア。たのゆさたよ此方のら。下女が首をど〳〵肩毛をどかり

〳〵そゝ〳〵刺てゆる。能優似面のふ〳〵絵をど。こゝ
所持〳〵て子者ふ〳〵是をあこ〳〵ゆうけた。夜へ連中を
らもつどへ新内物真似斬つけふ。婀娜ふ姿をえんせゆと〳〵。
さゆぐ〳〵とろをつこせ〳〵ふ。さゆことる婢女へ仇娘をとべこ
者なるふ意氣てこの人〳〵助成ろ其出立ふ迷へこまこ〳〵ふ。て
ひこゆこてる者ゆと頻をふ色目〳〵ちゝとりへと加減の
るた居膳ち始ゆよろ〳〵て喰ふ氣ふ〳〵へ唯よ人ゆと面舞
退〳〵て。この本膳ふ居らんりのと。一向意をよせるふ。この

いとぐち姫が側女ふ可霄とらへる者あり。容ちとくるのこ
ろ。今ハ二十のとしころ。心さるなさへ後ーこのふに當家ハ久
しくつとめるうへよろとさろ〜ゑ者ゐまべ。駒吉夫婦ハ姫が
ことに驕万端のきふやうを。いとうとをく召つひるゐ。ちうゐ
可霄ハをを〜ところ。彼助成が男まへ。ぎさ〜ゑ氣さてに
おりひて恐ひ〜ふころを遇さ〜。いく〜ろとゐ中
とるゐとをえの笑さをひとぶとらへど。互ひ深く色こるゐえ。
内外の者おくるまぐ。さちゐ知る者ゐろりを。係きべ今霄

も助成へこのこて出會家居ふく。可霄とまのびあふまふ。
彼將監が慇謀ゐること。さとが不明〜ハせざきどゐ竊のよ
可霄ふさやゑく。如何ふゐ〜〜徒姫さ。ん身が手引
ゐ首尾よくゐ。たとへ一回の添卧ふて。吾ゐなさせてゐゐふ。
其手蔓を得く。廣井の金を味く取ここその上ふて。ん
身とゐろよくそひ遂く。うまー〜立帯ゐもるゐきべそを
なのーこふ折をんこのこを。姫が媒人ゐむゐろと。色よおと
よを慾ゐゐづけ。日頃の口息よりち近れバ流石の可

街髪助成

可宵

宵も女なれバ此一言に欺かれ。兎まれかくまれ自さへ。
あのちかひをてなまからざれバ。いと〳〵易きことなれバいかにも
媒しくまいらすべし。且ハこのならびの両親とも一門なる
春豊どのが。能登守。七夕會の御振舞にて。夜とても彼所に
いらせ給へバ是さいはひの折にして。そのうへの御ぐし姫君
も御身がことを憎からず思ひ給へバ。いつとてもさも慕こ
しき風粧なれど。もしやそなたに會でハさぞかし吾
身を捨るならんと。おもへバ今迄このことを御身に語らして

いましめ前のことへまたがることゞバ翌の夜ひそかに奥かたの。
切戸の方よりしのび給へ。よく姫君なることのよしを自らが
よく傳へなバ。さぞかし嬉しくおぼさん。宵よりこつけかよ
むかしおけバ御部家に琴の音なかる頃。かの畫をたがへと来
らせ給べし。とハいへ自へ歳増なく。姫君へまことつかへのかた
勝れる色香に惑ひとる思ひ。いかし深入せるやうに。このたび
誓言をとれぬゆへ。今でしつしこたびまへかしと。千諸事
まさかにさしかへし。何角とたちひとまもあへし合せ人眼も

わきべ助成へやどて可霄と別れをる。此日へ我家ゑ
ゝのゑりつく。意の中ゑ勇こ立ち最早日頃の謀計ゑ十ゑ
八九へ仕員ゑ。きまべ。旦の夜姫をうまくやりこけ。其上ふてゝ
可霄を偏寄。十分姫をゑびくゝ。兼て伯父貴の望
のごとく。山子の里ゑ誘出して。姫と可霄を両手のそろを
情夫るゑよへぬ。住居。風雅ゑくぶゝをせんものと独を
笑つがゑ入相の鐘聞こうよ蜜書を認め。不斷へ来下
迴り。毛反崖太を使ひとゝ。将監成安ゑ詐へ。件の一儀

を住進ゑゝ。明るをゑそゝと待居る。扈首ゑ徒姫へ。
今ふ七夕の節會ゑとて。父身言へ妻りゝとる。春豊ゑ簾へと。
出ゆく。ゑとゑ婢女を昼間の座鋪ゑ呼あつめ。とゝぐゝさべ
めく哭ゝ振。戯場のゝゑさを仕さけゝ。男の裏醜ゝまゝべ。
うゝる新ゑいゝとて。皆助成ゑ娵娜姿を。言をそゝへて
偏そゝ。松島屋ゑ依てゝるのゝ。イヤ豊島屋ゑ正ゝ。都
延若の面ゝげゝ。どこゆらあるゝ。忘らまぬと。好とゑへで
何ゑつゝ。意ゝきゝゑ心ひゝきゝ。尊をゝ

今は歳ごろのうるはしく下もえらぶる若草よ。蝶の羽袖をさそふごとく。春情らとたゝ何とうのく。唯助成ばかりとしく。店さ仕業をとる時は玄関口うらさ現さ又臺所み来る時は納戸口うゝ細目ふらんふるこ。のうゝふりふり附墓ど。るまとぶゝ未ぐ初意の他ふはそれと云ふさ。物ありとゝ九風情をんてとる。可爾は房よ人なたゝ。徒姫さちちく拒昨日助成とちゝたこゝ。ごとゝ日頃ろゝて助成ぐ。ぢめふこゝろとまゝ。ごゝゝ男と生まさふはたゝ一度の保障

ふてる。ふりもひの孔の晴さんるゝと及びるての自ふたのこ。姫君ふとう思ゝめと業餅こて駄ゝけ。他よ勝ど男まへ意よ尊卑のぐゝふゝと自ゝりとと義ゝ兵。ふのふ塩男を夫ふりちゝ。行未たのゝくゝさん物をこれふゝけて媛君は女の宇よる果報るの庭ま。アふどよゝと彼方ゝら。是程まぐふ思まゝるのふはテモふ義女ゝひちとよとて。巳ゞ真の意よふぐまま口ふまゝ世てとえゝゝ。よゝ左ふくとる意よふ集まゝいとゝ可愛とふりひふる其あゝ

あくふ其人は。恐きうらるくと聞らへハ。姫いらまーさそぶ
さ。飛立やうふ。ありへ。可霄の手まへも面目なく。さも
羨ーー九顔さる。逆上ーーあるく仕ぐふ。イと笑ーーも
口のうち。可霄ハ早とこれをさらーー。今霄ある。ぶれ居
間まで。忍び来るこのやくそくるきび万端ハ自ようせ
ーまへとらーく。殘ハ得かさ。内外さもの。びーく髪を直さ。
化粧のうちを賭ひく。黄昏をあそーーと待るを。かうふ
知るものるうーる。頃ーーも今ハ初秋の日蔭るとぐふ

入浸ーく。庭のやま水樹々の葉ハ。宗ーーく音ふ霄の間ハ。
座舗回りの掾先ハ端居ちーく寄つどひ。婢女吉の。
まーく。殊ハ此夜ハ遁の主人夫婦が留主るきび。誰ふ
えぐのるとエるるく。心の侭の高声ハ。さ笑ハ合ーく戯れの。
雑談ハ下へ落ぐるて。果ハ賤氣のあくびとる時ふんはし
とたまーく。可霄ぐのるーて勝手ハ退ま。徒姫と居間
ふとるまひ。るエ余の人の寢ちぐる。其つまーぐを待ちと。
床ハこのぐりと立琴をとめく。嬢の膝ちーく。直ビいふぐ

たづゝーの願ひの糸る今宵こそ逢瀬うれしー天の川。
星の契りは一夜より。いく代をのゆゝとへ長く。のゝるそか
るふるあらいぞる。秋去衣せぬやうよ。二人の中るむつまじく。
七箇の池や八ツ橋の仙音さへるいとやさしく。徒姫はこのさ
るらーー。聲うるへくる是ふ訓ふ其唱哥を聽べ。

うるさよとへたゞるゝらとせーーそねことゞ。よひの
いるゞヒへひとよのあゞうひだをまくらよなやゞるよ
せことはるくゆよ。さだるゞまゝ。ーーやいやいる

とゝ。さるぬげこのおとへらくせのうえかふひゞく。金のは
さまゞ。街髪結之丞助成へ。のゝゝ可爾と約そくの時と
くるるるりまゞ。今宵を一正のたまとかゝひ。昨日よりーて
負ごらへよ。有とゆゝる質種を殘らゞさゝゝ。ちこへ。
尚る町中彼方是方と。息子手代をいさぶりて。そこゞく金を
借あつ先日頃意よ望のゞくゝ。衣類提物。腕守。鬘の先
このゝ法る先まゞ。五歩るとるさぬ當世風俗。のてへ揚貴
妃小町て。如何ゞ冠をふゝとゞへと。自恰二割る相庭を

引上ぎ新らしたる拉下駄の音さへ忍ぶ横町の板の石よさーよろ〳〵。そろと探ぎび寄よたるぞ。左右へひらくさそぐ仮よ明〳〵ゑそろ不這入つ植込垣根をいく重とるく。鋪石傳ひふ行かとふ彼大座席の庭先を回り〳〵ゑさび茲よまさいと風流なる壺の中茶室とゑへ〳〵待合ふ行の分離の拔折戸なり〳〵。こなるこの亭をゑゑさせべ未ねり行燈のあびゝ〳〵。下ふ居ま〳〵徒姐ぐ。さる艶ーさ聲とるふ。調る琴の音いつさへ虫の音ゑへ〳〵此野よ聽へ其風情たとふる方なく。彼高倉院の勅をうけ。藤原の仲国が嵯峨の奥ふたづ称ねたるふぐ回ま逢さまふ小督の局もかくやふん。又ハ曹子ぐこのよハまーー。淨瑠璃媛の再来ゑとるぐふ汁りの粧ひよ是ま〳〵ぐ夛くの女ふる。思ひありぬま色情よ。なとへハ引ぬ助成も今此姿ま〳〵るよるる。流石ふ胸をどたつゝせ。首をぐのともぴり〳〵と魂さふふ虚空ふとび出ーー。かきぐまと〳〵〳〵余念なく。ゑとれ〳〵茲ふ聞入ち琴の調子も是まぐふ。なふひ覺へーー綾靏の唱哥よ今ハつゝと。

糸竹を調べ
助成忍て
徒姫が寝所
ふこのちふ圖
徒姫

可霄

忍ぶ其身をうち忘れ。腰ふさ〳〵る篠笛を口ふうつ〳〵そへ竹の音色るハぬ合の手をだす。

「そのうるゝごとる。あく迄こぐ〳〵と。このあいとこのけく

いと〳〵とへんゞ。かんるぎふ〳〵てたとこぎの

むとぶるふ〳〵けうちちけさへも。ぬぎくるゞ

ゑんちよんぐさ

此笛の音をきつけく。たゞうふそれぞとさとり〳〵や。

可霄ハ先より庭ふかをるち。そつと這方ふ歩行つ。

枝折扉あけく助成が。手をもちそく引よせるゞ。

るふう竊々さてやく。脊をを叩ひく〳〵ゐとと。笑ひ

るゞく〳〵ふ庭先を回り〳〵〳〵縁側へいざるふ姿を見る

より。姐ハ今さらく〳〵とおどさ嬉しさえづうしさ。

胸の動ゑ乳ゞ一時よ目元へ出く真赤るゞり。何といふもと

ことだるゑく。唯ふり袖をのれよあく。さしうらいく居

さをしふ。可霄へこうえ傍ふある。琴をるゞよをさをゞり

る。用意ゑく夜具を去た。行燈の側よ臥ふゞる。

ことゝ袖まゝ灯を消セバ傍る闇くゝる俄る。愛い
ろ〻アレこそと云つゝ不慮助成が膝よりそ
ゝ。可胄ハあつとり笑ひつ。サアは両人とるものつゝとて。云
こゝ〻るゞ〻其座を立ゝ。次の席へのゝ〻ゝる跡の
ところハ如何ヒーゆ。姜ーく作者がいとぐるを見
物ゞのあつゝくこゝ〻ーよく知さまふ一件おまべ。こゝる
推察の通りなるべ〻ー。斯ゝ此夜も今いくゆ。暁ゝる
ちゝ〻ゝゝりいまべ。可胄ハとゝより起いで。家内の人ハ

あゝまこぬうちと元の切戸より助成を。そゝとあゝるゝく
このへーゝるなゝ。誰ある者もあゝりるゝまべ此夜より
ーゝゝ徒姫へあハぬむゝーふ百倍のおゝひ増りく
助成を明くまとるハ忘まゝくゝ。可胄と共ゝ合せ
おゝるハふまゝゝハ両親を助ーとゝーゝ物おゝゞ。
惑へ見物さゝゝへ講とゝくゝゝ見ハ外へいゞ。う後て
途中ハ助成と出會約そゝるーかゝゝハ附そゝ子
者ハりのをとゝを。このゝゝ他言を口止ーて。役首の教

見。是首の船遊。果ハ築地の出會茶屋。一寸間仕ごとゝ重るうち。いつゝ可雪と助成が。嘲つゝとけたる妾まゝ。徒姫ハ知といへど。今さら恪氣とるゆゑ。三人ひとゝ心を合せ。尚ものくさとへのことゝ思ひあのびゝのくふひり終。

笑談貧福軍記三編卷之上終